

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(C)（特設分野研究）

研究期間：2018～2023

課題番号：18KT0078

研究課題名（和文）宗教言語の共存性と創造性：古代メソポタミアの祈禱と中世日本の祭文の比較研究

研究課題名（英文）Coexistence and Creativity of Religious Languages

研究代表者

細田 あや子（Hosoda, Ayako）

新潟大学・人文社会科学系・教授

研究者番号：00323949

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：宗教言語の特徴を明らかにするため、古代メソポタミアの宗教的職能者アーシブによるいくつかの儀礼文書と、日本に古くから伝わる民俗信仰や神楽における祭文などを検討した。メソポタミアの儀礼研究に多くの時間を費やしたため、日本の儀礼については先行研究に依拠する部分が多かったが、異なる宗教言語の特徴を比較することができた。本研究により、儀礼の言葉は神が発する言葉ととらえられ、現世や異世界の創造に大きくかかわることが明らかとなった。病気治療や災禍に対する儀礼は、悪のない調和のとれた世界を作り出すことがその根底にあり、そこで唱えられる言葉、唱えことには、行為遂行性（パフォーマンス）が認められる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

異なる宗教言語を比較することにより、それらに認められる共通の特徴を見いだすことが可能となった。宗教儀礼のなかでは人間が唱える言葉が、神に由来するととらえられ、世界に働きかける大きな力を有する。また、儀礼では、原初の創造の物語を語りつつ、世界の調和を保つことが行われ、儀礼の言葉は神話そのものと言える。オラリティに注目した本研究により、今後さらに異なる時代や地域の宗教言語の特徴を考察する展望が開かれた。

研究成果の概要（英文）：In order to clarify the characteristics of religious language, we examined several ritual documents written by the ancient Mesopotamian religious functionaries, asipu, and ritual texts used in folk beliefs and ritual texts in Japan. Because we spent much of our time studying Mesopotamian rituals, we relied heavily on previous research on Japanese rituals, but we were able to compare the characteristics of different religious languages. This study revealed that the language of rituals can be seen as the language of the gods, and that they are greatly involved in the creation of this world and other worlds. The basis of rituals for treating illness and dealing with disasters is to create a harmonious world free of evil, and the words and chants recited in these rituals show performativity.

研究分野：宗教学

キーワード：宗教儀礼 メソポタミア 知恵の神エンキ/エア 言霊 アーシブ シャーマン 祈り 祭文

1. 研究開始当初の背景

古代メソポタミアの宗教に関しては、未解読な粘土板資料がまだまだ多いものの、さまざまなデータベースの普及により解読が進み、現在研究が活発に進行中である。宗教儀礼については、神殿や王宮での公的儀礼や、個人の家での私的な儀礼について書かれた粘土板が、考察の対象となる。儀礼の目的や内容は、病気治療、災厄の回避、占いのために予兆を得ること、建築儀礼、戦争にまつわる儀礼など多岐にわたる。儀礼文書には、儀礼執行者が行う儀礼動作や唱えるべき文言の指示が書かれているが、それらを解読してゆくと、祈りや呪文の行為遂行性（パフォーマンスイヴィティ）という機能について、検討すべき課題が浮上してきた。儀礼で発せられる言葉は、神の顕現を創出させ、その場を聖化させる力を持つと考えられるが、その構造的な解明が不可欠である。

このような宗教儀礼における言葉の働きは、日本の祈禱や祭文（儀礼や芸能において読誦される願文）にも同様に見出される。それらに関する知見を援用し、古代メソポタミアの儀礼（紀元前3千年紀～前5世紀）で唱えられる祈りや呪文を、日本に古くから伝わる民俗信仰や神楽における祭文と比較検討することにより、宗教言語と儀礼研究に新たな視座をもたらすことができると考えられる。このような学術的背景のもと、特設分野研究の「オラリティと社会」というテーマ設定のなかで、「宗教言語の特質とは何か」という問題の考察が重要である。

2. 研究の目的

以上のような状況を踏まえ本研究は、古代メソポタミアの宗教儀礼と、中世日本の祭儀や民俗信仰や民俗芸能の神楽などを比較考察し、そこで唱えられる宗教言語——祈禱、呪文、祭文——の働きと特性を解明することを目的とする。言葉が神々を現前化させ、聖なる空間を創造・開示するメカニズムを、儀礼における神霊と人間と言葉の動的連関に着目して検討する。儀礼のなかの所作や身ぶり、道具や儀礼空間にも注目し、儀礼執行者と参加者による言葉と所作を通して形成される神霊と人間とのコミュニケーションの特質を、オラリティとその共在性の特徴から解き明かす。さらに儀礼執行者自身にも着目し、その機能や技についても明らかにする。メソポタミアの場合、アーシプという宗教的職能者がさまざまな儀礼を行っており、彼らの社会的役割にも注目し、宗教言語を語る者たちの背後にある思想を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 古代メソポタミアの宗教儀礼の文献資料と画像資料を解読してゆく。神像制作儀礼のほか、除災儀礼などの文献講読を進め、祈りや呪文の目的や効果の相違に基づきテキストを分類する。さらに儀礼や祈禱が描かれた画像資料（円筒印章、石板など）も分析し、儀礼の所作や空間状況を画像資料からも裏づけて解明する。

(2) 祈りや祭文に注目しながら、儀礼の行為遂行性および儀礼における聖なるものの顕現について、民俗学や人類学の知見も取り入れ、儀礼空間を多角的に分析する。

(3) 以上を踏まえ、メソポタミアと中世日本の儀礼における祈り・祭文の特質をオラリティがもたらす共在性に注目して比較、解明する。人間の祈りと、神からの託宣の双方の特質を、儀礼執行者に留意して明確にする。

4. 研究成果

(1) キシュプーに対抗する儀礼

古代メソポタミアの宗教儀礼のなかで、アーシプという職能者が行う儀礼について考察を進めた。そのなかでもキシュプーに対抗する儀礼文書の解読を中心に行った。キシュプーとは呪い、呪詛、祟り、怨念、怨霊、怨念をもつ生霊といった現象に近いものと考えられる。キシュプーにとりつかれると病気となり、不浄となり、呪縛の状態に陥ってしまう。そのため、病気の原因がキシュプーであると診断された場合、アーシプがキシュプーに対抗する儀礼を行う。

このキシュプーに対する対抗措置、病気治療のなかで最もおおがかりなのが「マクルー」儀礼である。マクルーとは「燃やすこと」という意味で、この名が示すように、キシュプーを行った者、仕掛けた者、敵対者といわれる人物をあらわした小像を火で燃やすことが、儀礼の主眼である。

マクルー儀礼の、I から VIII まである唱えごと文書（儀礼的発話指示書）と儀礼全体の式次第の指示文書（儀礼的動作指示書）を解読した。その結果、二日間にわたって行われる儀礼において、はじめにキシュプーを行った者は、自分がかけたキシュプーを上回るより大きな——アー

シブの——知恵と技により、壊滅的な死に至ることとなる。他方、死の状態にあった病人は再生し復活する。アイデンティティを確認した病人は、通過儀礼を経たといえる。アーシブがキシブプーを封じ込めることで力の転換が起こっており、マクルー儀礼の力学が読み取れることが明らかとなった。

(2) 悪霊に対する唱えごと

メソポタミアでは、病気を引き起こす要因にはさまざまなものがあると知られていた。多種類の悪霊、キシブプー、供養を受けていない死霊などである。そのため体調不良や病気を治すためには、悪霊を追放し遠ざけることが必要とされ、アーシブがそのような儀礼を行っていた。アーシブの儀礼のなかから、ラマシュトゥウやウドグ／ウトゥククー悪霊に対する唱えごと、つまりこれら悪霊による病気や体の不調を治すための儀礼について考察した。ウドグ／ウトゥククー悪霊に対する儀礼では、この悪霊のほか、アルー悪霊、ガルー悪霊、ラマシュトゥウといったさまざまな悪霊を払うための唱えごとと所作が行われる。その唱えごとの解読にあたり、ファルケンシュタインが分類した唱えごとのタイプなどについても考察を加えた。とくに「マルドゥク・エア型」とよばれるタイプの特徴を分析した。この唱えごとにおいては、エア（エンキ）に従って行動するマルドゥクの役割をアーシブが引き受けることとなるため、さまざまな所作をとおし悪霊を追い払うアーシブは、知恵の神エアの媒介者となる。エアと病人を媒介し、病気を癒すことが強調されている。唱えごとと儀礼の行為についての文書の読解をとおし、アーシブの儀礼の特徴が明らかとなった。

(3) ナンブルビ儀礼

ナンブルビ儀礼は、何かの異変を目にしたたり何かの事柄を被ったりした人物が、それはこれから起こる悪や災いの前触れ、予兆であるにとらえられる場合、その予兆やしるしからもたらされる悪や災禍を未然に避けるために行われる儀礼である。個人やその家族にふりかかる災いの予兆や、国家の命運を左右する予兆もあるが、アーシブたちはそれらを回避するための儀礼を行っていた。多様な儀礼で唱えられるべき文言が定型化され、アーシブは言葉による術を駆使していたことが明らかとなった。さらにアーシブは、悪や不浄を移動させ、ある人間の将来を神々との関係のなかで変更できる力を有していると言える。彼らには予知能力があったと考えられる。

(4) 「アーシブの要覧」

古代メソポタミアの宗教儀礼のなかで、アーシブという職能者が行う儀礼について考察を進める際、着目すべきが「アーシブの要覧」とよばれる文書である。この文書はアーシブの活動や職種、職域、また彼らの特徴を考察する際きわめて重要な文書である。ここには、アーシブが身につけるべき事柄が列挙されているが、数多くの唱えごととも挙げられている。

このことは、唱えごとの言葉によってアーシブは災禍や不幸を除去していたことを意味する。アーシブたちにとり、唱えごとはきわめて重要であったが、ここからメソポタミアの宗教言語の創造性が考察される。

「アーシブの要覧」から、アーシブは学ぶべき事柄の研鑽を積み、修行をして知恵や技を獲得していったことが読み取れる。それらはきわめてきわめて多岐にわたり、人間を取り巻く自然や宇宙に多岐にわたり、人間を取り巻く自然や宇宙に関する高度な知恵へと到達する。関する高度な知恵へと到達する。一つ一つ一つ一つ段階を追って段階を追って習得するよう導かれており、課題習得するよう導かれており、課題を身につけてゆくことがイニシエーションである。学び全体を身につけてゆくことがイニシエーションである。学び全体がアーシブの通過儀礼でもあることが明らかとなった。

(5) アーシブと知恵の神エンキ／エア

アーシブの儀礼において着目すべきは、唱えごとは知恵の神エンキ／エアによるもの、エンキ／エアから発せられたものとみなされていたことである。アーシブ自身が、「アサルヒ、エリドゥの息子が、唱えごとを唱えた。」「その唱えごとは私のものではない。／エアとアサルヒの唱えごとであり、神々のマシュマシュであるマルドゥクの唱えごとである。／彼らが（それを）唱え、（そして）私が繰り返した。（唱えごとの言葉）」と述べる文言がある。このようにアッカド語では「この唱えごとは私のものではない」「（それは）〇〇神の唱えごとである」「〇〇神の命令に従って」「〇〇神が唱えごとを唱えた／言った」といった語句がよく用いられ、唱えごとは人間によるものではなく神によるものとみなされている。

以上のことから、唱えごとを唱える主体はエアとアサルヒであるという理解があったことが認められる。アーシブの守護神であるエアと息子アサルヒ（マルドゥク）が唱えごとを唱え、それをアーシブは真似て繰り返していたことが強調される。唱えごとは、エア、さらにその息子アサルヒ・マルドゥクに由来し、それを受け取ったアーシブが儀礼においてその文言を朗唱していたのである。唱えごとは、アーシブたちが守護神として信仰していたエアから与えられたものと理解されていた。こうしてアーシブの言葉には神性が宿り、隠された教えや知恵が含まれていると知られる。メソポタミアの宗教言語に神の力が込められているといえるのである。

唱えごとの言葉の力は、限られた者しか到達することのできないアーシブの秘義の一つであるが、伝承による共在性についても検討した。

(6) 神話と儀礼

アーシブは儀礼においてさまざまな植物や鉱物などを用いているが、たとえばタマリスクは、初期王朝、ウル第三王朝時代、古バビロニア時代の儀礼の唱えごとで、純粹、清浄、聖なるものと賛美されている。タマリスクの起源は神々に由来し、またそれは壮大な宇宙に属する一部ととらえられている。ほかにも葦、マシュタカル草（サボンソウ）、エール木、ビヤクシン、スギなど多種多様の植物や鉱物などが、アーシブの儀礼で重要な働きをするものと呼ばれかけられ、生動化されている。こうした唱えごとの文言は、宇宙との調和を図るための知恵と技を習得したアーシブによる「アーシブ文学」という領域に内包されると考えられる。アーシブの唱えごとが神話そのものといえよう。

他方、日本の儀礼や呪術においても、病気治療の儀礼で、世界の起源を語る神話が唱えられることが指摘できる。繰り返し語られる神話による儀礼の場の現出や構造に共通性が認められるのである。とくに祭文にも神話的な表象が含まれるものが認められる。いざなぎ流の祭文には、言葉によって世界が作り出されるという考え方があり、言葉への信仰がうかがわれる。言葉には何かを生みだしたり、悪を排除したりする力があるとされている。

さらにいざなぎ流の祭文では「すその祭文」が重要であるが、「すそ」とは広い意味では不浄や汚れをあらわす。そのため、儀礼では「すそ」を除去し、儀礼の場を清浄な空間にすることが重要である。このように悪や不浄を祓うことは、唱えごとや祭文に共通することも明らかとなった。比較検討をとおし、言霊思想の一端が明らかとなり、「祈りの言葉と神の言葉の力学」が構築される。異なる宗教実践のオラリティを比較することにより、宗教言語としての儀礼の言葉には、創造性や共在性が込められていることがより説得性をもって明らかとなった。

(7) 造形物の図像考察

メソポタミアの儀礼文書のほか、実際に出土した考古資料より、タマリスクや粘土で作った像などが悪霊から家を守る機能を持つと考えられていたことが明らかとなった。アーシブの儀礼で用いられた護符（アミュレットやタリスマン）の分析により、アーシブの働きや機能もより具体的に考察することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 細田あや子	4. 巻 97
2. 論文標題 古代メソポタミアの儀礼と造形	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 宗教研究	6. 最初と最後の頁 184-185
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 細田あや子	4. 巻 24
2. 論文標題 メソポタミアのアーシブの儀礼と樹木-タマリスクに注目して	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 比較宗教思想研究	6. 最初と最後の頁 1-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 細田あや子	4. 巻 96
2. 論文標題 メソポタミアのアーシブによる儀礼の唱えごと	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 宗教研究	6. 最初と最後の頁 176-177
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 細田あや子	4. 巻 150
2. 論文標題 メソポタミアのナンブルビ儀礼における悪や不浄の扱い	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 人文科学研究	6. 最初と最後の頁 31-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 細田あや子	4. 巻 22
2. 論文標題 ナンブルビ儀礼における唱えごとと護符	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 比較宗教思想研究	6. 最初と最後の頁 25-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 細田あや子	4. 巻 95
2. 論文標題 古代メソポタミアのアーシブ文学	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 宗教研究	6. 最初と最後の頁 145-146
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 細田あや子	4. 巻 94別冊
2. 論文標題 メソポタミアの災因論と病気治療儀礼	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 宗教研究	6. 最初と最後の頁 229-230
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 細田あや子	4. 巻 93
2. 論文標題 メソポタミアのアーシブによる儀礼の特徴	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『宗教研究』	6. 最初と最後の頁 231-232
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 細田あや子
2. 発表標題 古代メソポタミアの儀礼と造形
3. 学会等名 日本宗教学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 細田あや子
2. 発表標題 メソポタミアのアーシブによる儀礼の唱えごと
3. 学会等名 宗教学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 細田あや子
2. 発表標題 異端的図像学の可能性
3. 学会等名 西洋中世学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 細田あや子
2. 発表標題 古代メソポタミアのアーシブ文学
3. 学会等名 日本宗教学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 細田あや子
2. 発表標題 メソポタミアの災因論と病氣治療儀礼
3. 学会等名 日本宗教学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 細田あや子
2. 発表標題 メソポタミアのアーシブによる神像の「口洗い」儀礼
3. 学会等名 宗教史研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 細田あや子
2. 発表標題 メソポタミアのアーシブによる儀礼の特徴
3. 学会等名 日本宗教学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 細田あや子
2. 発表標題 メソポタミアの儀礼における媒介者・媒介物
3. 学会等名 日本オリエント学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 細田あや子
2. 発表標題 メソポタミアの儀礼研究
3. 学会等名 日本宗教学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 細田あや子
2. 発表標題 メソポタミアのアーシブによる儀礼
3. 学会等名 日本オリент学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 細田あや子
2. 発表標題 メソポタミアにおける「悪の足を切る」儀礼
3. 学会等名 宗教史研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 細田あや子
2. 発表標題 マクルー儀礼の特徴 通過儀礼としての側面に着目して
3. 学会等名 アッシリア学研究会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計9件

1. 著者名 細田あや子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 新潟日報社メディアネット	5. 総ページ数 72
3. 書名 虹への祈り 聖書にみるいのちのつながり	

1. 著者名 津曲真一・細田あや子編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 リトン	5. 総ページ数 430
3. 書名 『媒介物の宗教史』下巻	

1. 著者名 久保田浩, 鶴岡賀雄, 林淳, 深澤英隆, 細田あや子, 渡辺和子編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 リトン	5. 総ページ数 480
3. 書名 『越境する宗教史』上巻	

1. 著者名 久保田浩, 鶴岡賀雄, 林淳, 深澤英隆, 細田あや子, 渡辺和子編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 リトン	5. 総ページ数 571
3. 書名 『越境する宗教史』下巻	

1. 著者名 津曲真一・細田あや子（編者）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 リトン	5. 総ページ数 376
3. 書名 『媒介物の宗教史』上巻	

1. 著者名 勝又悦子・柴田大輔・志田雅宏・高井啓介・細田あや子ほか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 リトン	5. 総ページ数 423
3. 書名 『一神教世界の中のユダヤ教』（市川裕先生献呈論文集）	

1. 著者名 越宏一・細田あや子・辻成史・小池寿子ほか	4. 発行年 2018年
2. 出版社 竹林舎	5. 総ページ数 414
3. 書名 『中世美術の諸相』	

1. 著者名 杉木恒彦・高井啓介・細田あや子・渡辺和子ほか	4. 発行年 2018年
2. 出版社 リトン	5. 総ページ数 376
3. 書名 『霊と交流する人びとー媒介者の宗教史』下巻	

1. 著者名 佐々木啓・鎌田繁・細田あや子・松岡秀明ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 リトン	5. 総ページ数 284
3. 書名 『死生学年報2019』（東洋英和女学院大学死生学研究所）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関